

# 慈悲の実践

稲葉秀賢

(大谷大学教授・文学博士)

八八

一

現代の精神的状況に於ける最大の欠陥は、永遠なるものを見失っているということである。われわれが真実に人生を生きようとする場合われわれは此の世を超えた永遠なるものとの邂逅を持たねばならない。そうでない限り、われわれの生は真実なるものとはならぬであろう。何故なら、永遠なるものとの邂逅を持たなければ、人は知らずして傲慢となり、自らの存在そのものをも脅かすに至るからである。例えば近代に於ける著しい人間性の発達は、人間知性によって解決されない課題がないかの如き錯覚に人間を陥れ、そこに人間の限りない傲慢が生れたのである。その結果、人間は却って人間知性に依って、自らが殺されるという自己矛盾を招来したのである。全世界の人々がおびえている核爆発の脅威、それは人間知性が産み出した最も残酷な脅威である。

たしかに人間知性が産み出した科学は、われわれの生活に幾多の幸せを招来したに違いない。然し科学はそれだけで全能なのではない。却って科学的知識の止るところを知らぬ発達が、人間存在を脅かすことになったのである。そこに人間知性の行きづまりがある。科学を使うものは人間なのであるから、その人間そのもののあり方が反省せられないならば、科学的知識は恐るべき凶器と変るのである。ここに人間のあり方として、永遠なるものとの邂逅がなけ

ればならない。即ち科学を使う人間は常に永遠なるものに頭を下げて、敬虔な姿勢でそれを行使しなければならない。永遠なるものに頭をさげてゆくことが、人間の法だからである。その法に随うことがなければ科学が正しく行使されることはないであろうし、われわれが得た科学的知識も却って人間存在を脅かすようになるであろう。

『歎異抄』はこうした人間普通の法としてのあり方を教えるものである。即ち『歎異抄』の底に流れている教法は永遠なるものへの邂逅を通して、人間の真実なるあり方を教えるものである。歎異ということは、勿論直接的には「聖人のおほせにあらざる異義」を歎いたものであるけれども、その異義は広く人間知性の傲慢に対する歎きであるといってもいいのではないであろうか。ここに『歎異抄』が常に新しい生命を持ち、われわれに強く訴える意味があるといわねばならない。されば『歎異抄』の底を流れるひとつの課題は、人間知性と人間の真実のあり方を課題として、そこに普通の法を明らかにするものであるといえないであろうか。まことに、

「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて往生をばとぐるなりと信じて、念仏まうさんとおもひたつところのおるとき、すなはち撰取不捨の利益にあづけしめたまふなり」

という最初の言葉は、永遠なるものとの邂逅を通して人間の真実のあり方を示したものといわねばならない。人間の知性が永遠なるものへの敬虔な姿勢を忘れさせるように、更に人間を傲慢にするものは、人間の意志への過剰な信頼である。即ち人間の道徳的意識がそれだけで人間の真実のあり方を規定し得るといふ過信である。勿論、人間存在は常に我と汝との関係において成立し、そこに道徳的意識が生ずる。我と汝との関係において道を行ずるところに、人間の価値があり、尊厳がある。まことに人間が人間の生活をするに当っては、我と汝との間に存する理法に従う義務がありそれを果すところに徳を具するのであって、われわれはこうした人倫的關係のなかに人となり、自己形成的に倫理的存在であらねばならない。

然るにかくの如き道德的自覚は、人倫の理法から迫られる徳の実現が実は容易でないことに気づかねばならない。若し徳の実現としての理法の実践が容易であるならば、道德的自覚は却って稀薄とならざるを得ない。即ち我々の生きてゐる現実には、それが我と汝との関係において成立する限り、そのまま道德的現実である。われわれの現実がそのまま道德的現実であるということは、逆に云えば、理法の実現としての徳の成就が容易でないこと、従つて道德的自覚がそのまま不徳の自覚であるということである。まことに人倫の理法は、無上法的權威を以てその実現を迫るけれども、われわれの中には却つてそれを阻む我執の存在を如何ともすることができない。こうした不徳の限りない克服そこに道德的自覚がある。そしてそこにまた道德的自覚の悪無限的な行きづまりがある。この行きづまりを破つて眞実に生きる道は、永遠なるものとの邂逅によってでなければならぬ。『歎異抄』はこうした永遠なるものとの遭遇を通して、人倫の理法が眞に実践せられる道の説くものである。

「善人なをもて往生をとぐ、いはんや悪人をや、乃至 煩惱具足のわれらはいずれの行にても生死をはなることあるべからざるをあはれみたまひて、願をおこしたまふ本意、悪人成仏のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人もとも往生の正因なり」

という素晴らしい断言は、永遠なるものとの邂逅を通して、謙虚に生きるものの姿勢を鮮やかに示したのである。ここでは永遠なるもの前に立つて、善もほしからず、悪も恐れなき無碍自在な境地が開顯せられている。そしてその立場にあつてのみ、

「信心さだまりなば、往生は弥陀にはからはれまいらせてすることなれば、わがはからひなるべからず、わろからんにつけてもいよいよ願力をあをぎまいらせば、自然のことはりにて柔和忍辱のころもいでくべし」

ということになるのであつて、このことなしに人倫の法の実現として徳の成就はあり得ないのである。ここに『歎

『異抄』が永遠なるものとの遭遇を通して、人倫の徳の実現が可能であることをあらわしている意味がある。それは如何なる時代にも通ずる人間の眞実なるあり方を説き明かすものであって、ここにこの書が持つ変らない生命があるのである。

こうして人間の眞実のあり方を示すところに『歎異抄』の課題があるのであるが、それを慈悲の実践を通して明らかにしたのが、聖道浄土の慈悲のかわりめを示す一章であって、それが現代的課題として、如何なる意味を持つかを明らかにしたいと思う。

## 一一

「慈悲に聖道浄土のかはりめあり。聖道の慈悲といふは、ものをあはれみ、かなしみ、はぐくむなり、しかれどもおもふがごとくたすけとぐることはめてありがたし。浄土の慈悲といふは、念仏していそぎ仏になりて、大慈大悲心をもて、おもふがごとく衆生を利益するをいふべきなり。今生にいかにいとをし不便とおもふとも、存知のごとくたすけがたければ、この慈悲始終なし、しかれば念仏まうすのみぞすえとをりたる大慈悲心にてさふらふべき」。

ここに聖道浄土の慈悲を分別したのは、ただ聖道浄土の勝劣を問題にしたのではなく、慈悲の実践を通して、永遠なるものとの邂逅なしには、慈悲の実践があり得ないことを明らかにせんとするのである。それ故に聖道の慈悲として、「ものをあはれみはぐくむ」ことが不可能であり、それに意味がないということではなく、却つてものをあわれみはぐくむ眞実が「念仏まうすこと」によってのみ、眞実に実現することを明らかにしたのである。

「聖道の慈悲といふは、ものをあはれみかなしみはぐくむなり」と云われる。ここに「もの」というのは衆生であるから、それは広く人間愛ということ、現代的に云えば、ヒューマニズムであるといつてもいいであろう。ヒューマ

ニズムというのは、広く人間の生活について深い関心を持つことであるといわれる。「ものをあはれみはぐくむ」とは、まさしく人々をして苦を離れ、楽を得しめんとする人間生活への関心である。かくてヒューマニズムが人間生活についての深い関心、人間への愛情を持つことであるとする場合、それから生起するいろいろな問題が考えられる。そしてまたここに人間生活といわれるわれわれの関心の事実が何であるか、従ってまた根源的には人間とは何ぞやの問題が追究されねばならない。

凡そ人間への愛情はまず広さを持たねばならない。自分の子供は愛することができるけれども、隣人の子は愛することができぬというのでは、本当の慈悲ではない。自らを愛するが如く隣人を愛し、血のつながりや環境の結びつきを離れて同じ愛情を持ちあうことは実際の人間生活ではあり得ないことであろう。けれどもそれがあり得ないことであるが故にこそ、そうした人間愛を持つことが願われるのであって、そこに人間の完成がある。「汝の敵を愛せよ」ということは、実際的にはあり得ぬけれども、あり得ぬからこそ、そうした人間への広く深い愛情を持つことが、真のヒューマニズムなのである。そしてこの人間主義に立たぬ限り、人間は相互に暖かく手を握りあってゆく幸せを把むことはないであろう。

かくてヒューマニズムは人間の深い愛情を持つことを意味するのであるから、厳密には人間以外への愛情を意味しない。例えば動物に対する愛情というものは、ヒューマニズムではない。然し動物への愛情は、動物を人間化してそれに愛情を持つのであるから、それをおしのけてヒューマニズムを主張する必要はないであろう。然しとにかくヒューマニズムは人間への深い愛を持つことであるから、何処までも人間のうちに求められねばならない。従って人間への愛情は更に人間を如何なるものとして把握し、それに愛情を持つのであるかということが規定せられねばならない。凡そ人間とは如何なるものであるかを規定することは頗る困難なことである。人間そのものが複雑な性質を持って

いるのであるからその複雑な性質をおさえて、人間とはかくの如きものであると規定することは至難なことである。然し人間存在を追究する場合に、二つの面からその複雑な性格をおさえることができるであろう。

一に人間は本来悪人であるということ、人間を規定する一面があるように思われる。そこから人間の人間に対する不信が産まれるのである。そして人間への不信が人間への愛情を失わしめる。何人もその人を信ぜずして愛情をそぐことはできぬであろう。既に荀子は「人の性は悪なり」といって、所謂性悪説をたてた。たしかに人間は悪を好む性質を持っているので、悪人ほど却って人間らしいといい得る面がある。然しそれだからといって悪人であることは称讃されるべきことではない。そこに人間に対する深い悲しみがある。「人間だからなあ」という歎息は、悪人に対する深い共感がかくされてはいるけれども、同時にそれは人間に対する深い悲しみ、悪人であるということへの歎息をあらわしている。それ故に人間は本来悪人として悪徳を持つけれども、その悪徳から離れるところにこそ、真に人間的なものがなければならぬとして、却って逆の方向に人間存在の意味を認めようとする他の面が生れることとなる。

ヒューマニズムが人間に関する深い関心であり、それ故に人間への愛情であるならば、それは人間のあるがままでなく、人間のあるべき姿への関心であり、愛情でなければならぬ。従って人間がよし悪人であるとしても、その悪徳がそのまま肯定されるのでもなければ、ましてや悪徳に対して愛情を示すのではないであろう。却って悪徳を離れ得ぬ人間が、それ故にこそ悪徳を離れんとするところに、人間存在の意味があり、かくの如き人間への関心と愛情こそが真のヒューマニズムである。まことに人間があるがまま、即ち放縦であることが人間的のではなく、人間が自らの責任において、悪徳を克服するところにこそ、真に人間的なものであるのではなくてはならない。

かくてわれわれは人間を悪人であるというよりは、善意に満ちたものであると規定することができるであろう。荀

子の性悪説に対し孟子は所謂性善説をとなたといわれる。たしかに人間は悪人を軽蔑し、善人を尊敬するはずである。それは自らの中にそのような意志が存在しないから尊敬するということもあるが、やはり善人の善意をこそあるべき人間の姿として尊敬するのである。悪人を憎み、善人を尊敬し、醜いものを厭い、美しいものを好む、そこに人間形成の存在意味を認めているのが人間である。「その罪を憎んでその人を憎まず」と云われるのは、人間は罪を犯すこともあるけれども、それが人間の本質ではなく、寧ろ善意を貫くことができなかつたと何人の上にも善意を認めるところに、その人を憎まずという愛情を持つのである。そうでなければ人間に対する深い愛情が生れるはずはないであろう。

かくてわれわれは人間の積極的な善意にこそ人間の眞実を認め、こうした人間に対する愛情こそがヒューマニズムであると云えるであろう。ここにヒューマニズムが人生に於ける意味を持つてくる。たしかに人間の世界は悪徳に満ちている。それが偽らない現実である。それだからこそ、悪徳に満ちた人間の世界を善意の世界として、堅強に建設してゆくところにヒューマニズムの意味があると云わねばならない。

かくの如くヒューマニズムは、人間存在の意味をあるがままでなく、あるべき高さに求めるのであるから、より高いということがより人間的であるということになり、限りなくその高さを求めることになる。より善なるもの、より美なるもの、より真なるものを限りなく求めることにおいて人間はより人間的となる。従つてヒューマニズムの立場では、人間の中により高い真善美という如き価値を創造するものでなければならぬ。ここに人間が真善美というより高い価値を身につける為に、ヒューマニズムは当然教養ということに結びつかねばならない。もとより人間は常に真善美を求めることにおいて、他の如何なる動物よりも高さを持った存在であるが、その高さをより高く自己形成的に進める為に必要なのが教養である。教養とは一般的に云えば、人間が広い社会や各種階層の人達との接触によつて、

所謂人間への深い関心によって自己を形成してゆくことである。この教養を中心としなければヒューマニズムは成立しない。まことに教養の豊かさこそ、人間性の豊かさを示すのであって、それがまた人間の差別ともなる。それ故に人間は自ら教養を高めることに依って、自己形成に努めなければならない。然らばかくの如き教養とは何を意味するのであろうか。

思うに教養ということの意味は単なる学問知識の豊かさをいうのではなくて、人間的豊かさ人間的完成を意味している。まことに教養は専門的知識を必要としない。ともすれば学問知識のない人は教養のない人のように考えられるけれども、知識がなくても教養のある人はある。知識も勿論教養となるけれども、その知識が生活と遊離して、生活との統一的な合一がない限り、それは教養とはならない。換言すれば自己形成の道が忘れられる限り、如何なる学問知識も教養とはならない。学問知識はなくとも自己形成的に自らを高めてゆく人が教養のある人である。かくてヒューマニズムは教養によって成立するといっている。教養によって人間がより高い人間性を求めてゆくところにヒューマニズムがある。けれども、ヒューマニズムの立場は、飽くまで人間中心のであって、人間のなかにより高いものを求め、かくの如き教養ある人への愛情を示すものである。ここに人間愛の問題がある。

聖道の慈悲は「ものをあはれみかなしみはぐくむ」のであるから、それはヒューマニズムと相通するものである。それは人間が人間をあわれみかなしみはぐくむのであるから、富めるものが貧しきものを、強きものが弱きものをあわれむ愛の立場でもある。かくの如き愛の立場は、「おもふがごとくたすけとぐることはめてありがたし」と云われる如く、末通るものではない。「今生にいかいにをし不便とおもふとも存知のこくたすけがたければ、この慈悲始終なし」で、われわれは実際に一人の貧しきものをさえ助けとげることではできないのではないか。ここに聖道の慈悲の破綻がある。然しそれだからといって、聖道の慈悲は意味がないというのではない。却ってこの聖道の慈悲の

始終ないことを通して、そこにあらわれるのが浄土の慈悲なのである。更に云うならば、聖道の慈悲はそのままでは真実に実践の場とはならぬのであって、却って浄土の慈悲において、真実に「ものをあはれみはぐくむ」実践の場が成就することを示すものである。

## 三

ヒューマニズム即ち人間愛の立場においては、人間存在におけるより高いものを追究するのであるから、そのより高いものは常に人間的に肯定せられ、認められたものでなければならぬ。それ故にその高さは、より高いものといつても人間的な高さであることを否むことはできない。従つてその人間的な高さにあつては、人間愛といつても、それが常に強者の立場において行われるのである。即ち、貧富の問題にしても、富めるものが貧しいものにあわれみをかけるのであって、そこで問題にせられるのは貧しいものであって富めるものではない。少くも人間愛は如何に高いものであつても、常に貧しいものにそがれるものである。権利を問題にする場合でもそうであつて、権利のあるものが権利のないものに与える愛情に過ぎない。然しここで問題にされねばならないのは、富めるものはあわれみを受け、はぐくむ必要がないかということである。権利のないものよりは、寧ろ権利のあるものこそ、「あはれみかなしみはぐくむ」ことが必要なのではないであらうか。何故ならば、強者が弱者をあはれむという立場では真実に愛は徹底されないばかりか、そうした人間的立場にあつては、弱者は却つて傷つけられ、強者はまた弱者を傷つけることにおいて、愛の道を見失うからである。少くも愛が徹底する為には、強者や上位の意識があつてはならぬのであって、そこに貧しきもののみでなく、富めるものも養育せられねばならぬという、もうひとつ深い慈悲の場がなければならぬ。それが浄土の慈悲ではないか。浄土の慈悲は強者にも弱者にもそがれる慈悲であり、この慈悲においてのみ、

真に慈悲の実践は徹底するのである。

然るに弱者にも強者にもかけられる慈悲の立場は最早人間の立場ではない。人間の立場で行われる愛は、それが如何に高いものであっても、常に強者の立場においてなされるのであって、そこに「おもふがごとくたすけとぐることきはめてありがた」いのである。寧ろ強者の立場においては真に慈悲が行われないという深い自覚においてこそ、新しい世界が開けてこなければならぬ。まことに人間の愛は、「今生に」如何に最愛のものであり、いかに不便と想うても、思うが如く助けとぐるとは不可能である。そこにどうにもならない人間の行きづまりがある。その行きづまりにおいて、われわれは始めて永遠なるものの前に跪かざるを得ない。

「浄土の慈悲」というのは、念仏していそぎ仏になりて、大慈大悲心をもて、おもふがごとく衆生を利益する」のであるが、ここに念仏してということは何なることであろうか。ここに念仏とは勿論称名念仏であって、仏名を称念することである。蓋し仏名とは人間普通の法を示すのであって、それ故にこそ仏名はそのまま仏徳を示すといわれるのである。仏名が何故に人間普通の法と云えるのであろうか。蓋し仏名は南無阿弥陀仏であるが、南無阿弥陀仏こそ、人間の最も正しい姿勢を示すものである。南無阿弥陀仏においてわれわれの生は真実に行われるのである。何故なら阿弥陀仏は寿命無量において限りなき慈悲を、この慈悲を体として、光明無量なる限りなき智慧の徳用をあらわすものだからである。これは誠に我々が謙虚にその前に跪かねばならぬ永遠なるものを具体的に示したのである。その阿弥陀仏に南無し、帰命することにおいて、富めるものも貧しいものも、強いものも弱いものも、撰取せられてゆくのである。そこに一如なる平等の世界が開けてくる。宗祖は『教行信証』「証卷」に

「然るに煩惱成就の凡夫、生死罪濁の群萌、往相の心行を獲れば、即の時大乘正定聚之数に入るなり、正定聚に住するが故に必ず滅度に至る」

といい、その滅度を一如に帰して、

「然れば阿弥陀如来、如より来生して報応化種々の身を示現し給う」

と云っていられる。正定聚に住するが故に必ず滅度に至るという言葉には何という深い意味がこめられているであろうか。正定聚は勿論滅度ではない。然し、正定聚に住するが故に必ず滅度に至るのであって、住と必至とは一の事実である。従って正定聚には自ら滅度の徳を具するということが云い得るのである。けれども正定聚は必至滅度であってそのまま滅度ではない。そこに罪濁の群萌の悲しみがある。まことに人間の立場において愛は徹底しないのであり、如何に最愛のものであっても、その愛が始終ないところにこそ罪濁の群萌という悲しみがある。然し、人間の立場で愛が徹底しないということは、人間愛が行われなくてもいいということではない。飽くまで人間愛を徹底してゆこうとするとここにこそ、「この慈悲始終なし」という悲しみがあるのである。「ものをあはれみかなしみはぐくむ」慈悲は徹底されねばならぬのであるけれども、「おもふがごとくたすけとぐるときはめてありがたし」というところにまた人間の罪濁の悲しみがある。この悲しみにおいて始めてわれわれは、「ただ念仏して」と南無阿弥陀仏せずに行われぬのである。それがただひとつ慈悲を徹底してゆく道だからである。

何故ならば、南無阿弥陀仏することにおいて往相の心行を護るとき、正定聚に住するからである。正定聚に住するということは、必ず滅度に至ることであって、そこに一如平等の世界が開かれる。勿論われわれは臨終一念の夕に大般涅槃を証するのであって、正定聚のままで一如平等の境地にあるのではない。然し正定聚は必至滅度であるから、正定聚に住することにおいて、一如の徳が与えられるのである。一如の徳が与えられるということは平等の慈悲が行われるということである。

勿論「大慈大悲心をもておもうがごとく衆生を利益する」のは、滅度のはたらきであるに違いない。われわれにあ

るのは有縁の慈悲としての小悲があるのみだからである。その小悲すらも、「おもふがごとくたすけとぐる」ことは不可能である。まことに、

「小慈小悲もなきみにて、有情利益はおもふまじ、如来の願船いまさずば、苦海をいかでかわたるべき」

であって、ましてや大慈大悲心のあるべきはずがない。如何にしても大慈大悲心は「いそぎ仏になりて」始めて発現するのである。然し、正定聚に住するということは、必ず滅度に至るということであるならば、正定聚に自ら滅度の徳が具足することも否むことはできぬであろう。とすれば、罪濁の群萌のままに平等の慈悲が行われる道があるに違いない。そこに念仏生活の意味があるのではないであろうか。

思うに大慈大悲心とは如来の大慈悲である。それは浄土の慈悲であり、あの世の慈悲であるといっている。あの世の慈悲はこの世の慈悲と無縁ではない。此の世の慈悲を徹底せしめるものがあの世の慈悲だからである。聖道の慈悲はこの世の慈悲であり、浄土の慈悲はあの世の慈悲である。聖道の慈悲が始終しないのは、この世の慈悲だからであって、「今生にいかにとをし不便とおもふとも」「たすけとぐること」のできないのは、それが人間の立場でなされるからである。ただそれが徹底するのは、「いそぎ仏になりて大慈大悲心をもておもふがごとく衆生を利益する」浄土の慈悲においてのみである。従つてあの世を此の世に顕現せしめるものは念仏のほかにはない。「念仏して」というところに「いそぎ仏になりて大慈大悲心をもておもふがごとく衆生を利益する」道が開けてくるのである。それが正定聚の喜びでなくてはならない。

かくて此の世の慈悲としての聖道の慈悲が徹底しないという悲しみにおいて、

「しかれば念仏まうすのみぞ、すえとをりたる大慈悲心にてさふらふべき」

ということが云い得るのである。それ故に聖道の慈悲と浄土の慈悲とは、平行線の如く相対するものではなくて、

浄土の慈悲を眞実に開くものは、却って聖道の慈悲でなければならぬ。此の世にあって、「ものをあはれみかなしみがくむ」心のないものは、恐らく浄土の慈悲にふれることはないであろう。何故ならそこには念仏がないからである。「いかにいとをし不便とおもふとも存知のごとくたすけがたければこの慈悲始終なし」という悲しみにおいてのみ念仏はせられるのである。まことに永遠なるものの前に跪く謙虚な姿勢においてのみ、あの世の慈悲は顕現するのである。従って具体的に云うならば、「念仏まうす」身にあって、そこで行われる慈悲はもはや強者の立場で弱者にかける慈悲でもなければ、上位の意識においてなされる慈悲でもない。富めるものにも、貧しきものにも、善きにも、悪しきにも、強きものにも弱きものにも、平等のあはれみがかけられるのである。まことに人間の苦悩は貧しきものみにあるのではなく、富めるものには富めるものの苦しみがある。悪人だけがかなしいのではなく、善人も悲しいのである。弱きもののみがあわれみを求めるのではなく、強いものこそあわれみを求めているのである。そこに浄土の慈悲の深さがある。そしてこの浄土の慈悲においてこそ、人間は始めて平等に救われ、その所を得るのではないであろうか。まことに『歎異鈔』の精神は、常に新しく、生々と我々に迫るものを持っているのである。